

やはり俺の隣の席は色々とまちがっている。【完結】

秋月月日

比企谷八幡の隣の席の少年は、今日も授業中に奇想天外な行動をとる。

目次

だから大隣良夜は間違っている

つまり大隣良夜は歪んでいる

そして川崎沙希は幼馴染みの為に動き出す

それでも比企谷八幡は苦労する

やはり俺の隣の席は色々とまちがっている

だから大隣良夜は間違っている

ひきがやはちまん
比企谷八幡は僻んでいた。

学園カーストの上位層の主要メンバーが何故か集まってしまった二年F組の窓際の席に座っている彼は、今日もいつも通りに腐った瞳で人間観察に勤しんでいた。ああ、またあの女王が威張り散らしてるなー、とか、今日も世界は不平等だなー、とか——とにかくこの世の不条理を心の中で嘆いていた。

比企谷八幡は悩んでいた。

基本的に地味で目立たないカーストの下位層に属している彼は教室内では基本的に大きな行動をとらない。山のようにどっしりと、自分の席でただただ平和な日々を過ごす——それが比企谷八幡の日常だ。

しかし、そんな彼にも、いくつか悩みがある彼にも、ここ最近はずっとトップレベルで解決したい悩みがあった。それは他の生徒達が抱えているのかは不明な問題だが、少なくとも、比企谷八幡という人間にとってとはとても大きく問題だった。

その問題が発生するのは、基本的に授業時間だ。

しかも最悪な事に、担当の教師が誰であろうと関係なく発生する問題だったりする。

そういう訳で、本日最後の授業である六限目。

比企谷八幡はいつも通りに『隣の席の少年』の様子をちらっと横目で確認した。

消しゴムでドミノを鋭意制作中の少年が一人。

いやマジで、何で授業中にそんな派手な事をしてるんだよ！

死んだ魚のような目を珍しく見開きながら、八幡は教科書を読むふりをしながら隣の席の少年を横目でまじまじと見つめる。

その少年は、八幡と同じベクトルで目立たない容姿をしていた。無造作な黒髪が目隠れそうな程に長く、小柄な体躯は前の席の男子の背中中で完全に隠れてしまっている。中性的な顔立ちはその少年の特徴を大きく消失させてしまっていて、いつもは眠たげな目が今回ばかりは真剣一色に染まっている。

その少年の名は、おおとなりようや大隣良夜。

名前だけなら凄く格好いいが、容姿は自身の特徴を消失させてしまうかのように微妙で地味なアンバランスなその少年こそが、比企谷八幡をここ最近苦しめている大きな問題の元凶だったりする。

良夜に関して八幡が苦しめられている理由は、至って簡単。——授業中に机の上で真剣に遊ばれるとひやひやするよね？ って話だ。

根は真面目な八幡は当たり前だが授業を真面目に受ける生徒だ。無論、成績もそれなりに上位ランクに位置している。そんな彼が隣で盛大に遊ぶ同級生を目撃したら、そりゃあ動揺してしまうのは仕方がない事だろう。

「……………」

コトツ、と良夜は慎重に消しゴムを置く。机の上には既に蛇のような長さで消しゴムが配置されている。まだ授業が始まってから二〇分ほどしか経っていないというのに、良夜の机は消しゴムでいっぱいになっていた。ほう……こりゃあ随分な超大作だなあ。

（っつて、感心してみてる場合じゃねえだろ！ これ、流石に倒したらばれちまうっ

て！　そして見ていた俺も巻き添えくらって一緒に怒られるって流れになっちまうに違いない！　いつも貧乏くじばっかり引かされる奴は、基本的には不幸になるのがお決まりなんだ！

地味で目立たない青少年特有の悩みに頭を抱える八幡に気づかない良夜は、ただマイペースに消しゴムを置いて行く。これが一番後ろの席だったらまだ安心できたのだろうか、八幡たちがいるのは前から後ろからも真ん中としか数えられない列である。ぶっちゃけ、これで先生にばれない方がおかしいのだ。

だが、大隣良夜は一度もこの遊戯を注意されたことが無い。

このクラスの担任である平塚先生はおろか、他の全ての先生からも注意されたことが無いのだ。

（その隠密性は十分に尊敬するが、だからといってその蛮行を許容する訳にはいかねえんだよなあ）

っつーか、ただでさえ目立たない俺よりも目立たねえってどういう事だろ。ステルスヒッキー以上のステルス能力とか、それはもはや異能でしかねえと思うんだけど。

そして更に凄い事に、良夜は他の生徒達から全くと言っていいほどに感心を向けられないという特性を持っている。普通に考えて授業中に毎回毎回遊んでいたら、クラスのお調子者たちにダル絡みをされてしまうものだ。彼らは物珍しい事に集まる習性を持っているため、その最悪な運命は基本的には避けられない。

しかし、大隣良夜は自分の世界を守り続ける事が出来ている。

その大きな理由として、良夜の性格が関係している。

性根が腐っている事を自負している八幡が言えるような事ではないのだが、この大隣良夜という少年は基本的に自分が興味を持った人以外には極端に冷たい傾向にある。というか、良夜が他人と話している姿なんてほぼ見たことが無い。

良夜は自分に絡んで来ようとする人間を視線で威嚇し、絶対に自分に近づかせないようにする。それはまるで縄張りを守る動物の様で、コミュニケーション能力が必要とされる人間社会では絶対に必要のないスキルだ。

あえて言おう。この少年は比企谷八幡に匹敵する程に性格が歪んでいる、と。

「……………ふう」

(いや、なにやり切った顔で一息吐いてん——って凄ええええっ!?)

キラキラと顔を輝かせている良夜の机に拡がるは、ありとあらゆる文房具を駆使して創り出された超特大の仕掛け入りドミノ。一体何個の消しゴムを使っているのか、ドミノ以外の装置——橋や階段などにも大量の消しゴムが使われている。馬鹿だ、コイツは稀代の大馬鹿野郎だ……ッ！

ずどーん！ と教科書を読むふりをしていた八幡に衝撃が走る。授業中という緊迫したこの状況下でここまでの装置を創り出す事が出来ているこの同級生に、彼は戦慄までもを覚えてしまった。気のせいか、良夜の机の上の大発明を見て、教室中が静かにざわついている。と。

生徒達のざわつきが耳についたのか、黒板にチョークを走らせていた教師が後ろを振り返ってこう言った。

「おい、何かあったのか？」

「……………ッ！」

装置を載せたボードを神速で机の陰に隠す馬鹿が一人。

『……………いえ、何でもありません』

「ん……そうか。授業中は静かにするように」

「……………ふう」

ボードを神速で机の上に戻す馬鹿が一人。

『『(まだ諦めないのかこの大馬鹿野郎はあああああっ!?)』』

クラス一同騒然だった。なんかもう、どうしようもない馬鹿がいた。

先生からの注意が逸れたことでドミノの最終調整に入り始めた良夜に、八幡は大量の冷や汗を掻く。この馬鹿は逆に天才なのかもしれない。かの大発明家トーマス・エジソンも子供時代は問題児だと言われていた訳だし、この考えはあながち間違っていないのかもしれない。いや、間違ってるね授業中の遊戯は流石に駄目だね。うん、ちゃんと分かったた。

頬を引き攣らせつつも、八幡は良夜の様子を窺う。それは他のクラスメートたちも同様で、いつもはバラバラの二年F組が今この瞬間だけは一致団結していた。なんだこれ、昭和の青春ドラマの展開なの？

そして、その瞬間はやってきた。

「……………つと」

ポンッ、と良夜がスタート地点の消しゴムを人差し指で倒したのだ。

(ッ!? 始まった!)

先ほどまで色々と言っていたが、やはりドミノの行方は気になる八幡。後方で同じ奉仕部の由比ヶ浜結衣が「おおお……!」と声を出してしまっている事なんか気にしない。今俺は、隣の奇跡に夢中なんだ!

カタタタタッ、と消しゴムが勢いよく倒れていく。

『3』の字のような急カーブ。

階段を上って橋を通過し、再び階段を下って行く。

鉛筆を回して遠くの消しゴムを倒し、定規によって作られた坂を消しゴムが滑って行く。

滑り降りた消しゴムが次の消しゴムを倒し、ピラミッド状の消しゴムを上から順番に倒していく。

(な、なんか思ってた以上に一大スペクタクル!? これは流石の雪ノ下も驚いちまうんじゃないか!?)

あのクールビューティなユキペディアさんの驚く姿が目には浮かぶよう——いや、

アイツの驚いた姿なんてほとんど見たことねえから想像もつかんわ。由比ヶ浜の方だったらいくらでも頭に浮かぶんだがな。

そんな事を考えている内にも、良夜のドミノは終盤へと差し掛かる。

螺旋状の階段を上り、滑り台を滑って再び机へ。

そこからまた普通のドミノが始まり、その先には最後の大がかりな仕掛けである

（——う、打ち上げ花火、だと!? 流石にそれはヤバいだろ!）

『夜空に一発大輪の花!』と書かれた円柱型の花火が今だけは銃よりも恐ろしく見えてるわ。いや、本当、大隣、お前……なめとんのか。

流石に授業中に打ち上げ花火はやべえって! そんな騒音と光の応酬をどうやって教師から隠し通す気だよ!?

驚愕と動揺に襲われる八幡。どうやらそれは他のクラスメートたちも同じよう
で、「だ、誰か止めなよ……」「い、いやでも、大隣ってなんか怖いしさ……」と小
声で話し合っていた。ええいくそ、俺が止めるしかないってのか!?

「……………お、おい、大隣。流石にそれはヤバ——」

「(ギンッ!)」

「——お、落とした消しゴムは何処に行ったかな、うん……」

無理です。こんな凶悪な睨みには俺なんかじゃ勝てません。

何やってんのヒッキー!? と後ろの方で騒いでる奴は気楽でいいよな、とか思いつつ、八幡は教科書に顔を埋める。こうしている間にもドミノは最後の打ち上げ花火へと着々と近づいている。このままでは、本気で大変な事になってしまう。

しかし、八幡は止める事が出来なかった。

誰に求められることなくドミノは進み、そしてついに、最後のドミノが倒れた。
直後。

『『ッ!?!』』

二年F組全員が机に体を伏せた。

……。

……。

……。

……しかし、一向に花火の音が響かない。

そーっと、八幡は教科書から顔を上げ、大隣の方を確認してみる。

「……………ッ！」

キラキラ笑顔でガッツポーズをしている大馬鹿野郎の姿があった。あーなるほど、花火は想像にお任せしてるわけですか。こっちの心配とか恐怖なんて、端から考えてねえ訳ですか。ふざけんな！

クラス全体がどうしようもない程の微妙な空気に包まれる中、六時限目終了のチャイムが鳴る。

「それじゃあ、今日の授業はここまで」と教室を後にする先生などには気づかない二年F組の生徒達は怒りに満ちた視線を良夜に送るが、良夜はお構いなしとばかりにドミノグッツを鞆の中に仕舞い込んでいる。

と、そこで。

長い髪をポニーテールに纏め、細身の長身でスタイル良好な女子生徒が良夜の頭を軽く叩いた。

この時の八幡はまだ知らないのだが、この女子生徒は川崎沙希と言う、まあ俗に言う不良生徒の一人だったりする。

周囲の視線を一身に浴びている事には気づいていない沙希は恨みがましく睨んでいる良夜の頭をもう一度軽く叩く。

「痛っ」

「……今日も馬鹿な事をやってたから、これはお仕置き」

「だからって叩くことなかるうに……ん？ 今日もこれからアルバイトか？
大家族の長女は大変だねえ」

「あんたが大志たちの面倒を見てくれるからまだいい方さ」

「あーはいはい。それで、俺に何か用？」

「そ、それは、その……きよ、今日はバイトまでまだ暇があるから、さ。あ、あんと一緒に帰りたいなあ……なーんて」

「ツンデレ乙」

「ぶっ飛ばすぞ!？」

「はいはい、照れ隠しはいいからいいから。それで？ 一緒に帰るんだろ？ それなら沙希、さっさと帰ろうぜ」

「あ、おいコラ良夜！ あたしが誘ったのに置いて行くなあーっ！」

トタタタタッ！ と小走りで教室から去って行く二人を茫然と見送り、近くに由比ヶ浜が近づいてきている事にも気づかない比企谷八幡は二人が出て行った教室後方の出入り口を死んだ魚のような瞳で睨みつけ――

「リア充爆発しろ」

「ヒッキー本気過ぎて怖いよ……?」

――今日も彼の青春ラブコメは理不尽でいっぱいだ。

感想・批評・評価など、お待ちしております。

つまり大隣良夜は歪んでいる

短編が意外と好評で更に連載して欲しい、という声が多かったため、連載することにしました。

大賞用の作品を執筆中なため更新は不定期になりますが、どうぞよろしくお願ひします。

追申

今回は『隣の関くん』要素は皆無です。言うなれば、今回は『俺ガイル』要素のみで構成されています。

千葉市立総武高校の体育は三クラス合同で、月が替わった事で種目がテニスとサッカーへと変化した。

比企谷八幡と材木座義輝の相棒同士の無駄なやり取りや、その他大勢の何気なくも騒がしい会話を経過として取り入れつつも、この総武高校の体育は今日も恙なく

進行される。

「うし、それじゃあ二人一組でペア作ってちょっと打ってみろや」

体育担当の厚木先生の指示を受け、生徒達はテニスコートの四方八方へと散って行く。彼が担当するのはテニスであり、それは八幡が仁義なきジャンケントーナメントを勝ち抜いた事で手に入れた幸せなのかどうかもよく分からない時間であった。

「調子悪くて迷惑かけたくないんで壁打ちしてきていいですか？」といつも通りの得意技を使って壁際へと移動する八幡。ここ最近何故か八幡との新密度を上げている戸塚彩加は他生徒達からのペア要求をやりわりと拒否しながら、トタタツと小走りで八幡の方へと駆け寄って行く。

「比企谷くん。今日も壁打ち？」

「ああ、戸塚か。今日も俺なんかの為にこんなじめじめした世界に来ちゃってまあ……惚れてもいい？」

「あははっ。比企谷くんは冗談が上手いねっ」

冗談じゃねえんだけど、と八幡は心の中で号泣する。

「それじゃあ、ええと……今日は僕も一緒に壁打ちしてもいいかな？」

「断る理由が見当たらない。むしろ大歓迎だ」

急降下からの急上昇を経験した八幡はキモイぐらいに嬉々とした表情で戸塚との壁打ちを開始した。テニス部でもないのに何故かテニスが上手い八幡は戸塚を相手にしても引けを取らず、中々に互角な状態で壁打ちは進行されていく。ああ、なんて幸せな時間なんだろうか。今だけは生きてて良かったと思えるわマジで。

と、彼にしては珍しく幸せを謳歌していた時の出来事だった。

なんか、テニスコートの中央付近がやけに騒がしい。

（なんだ？ また葉山のテニス教室でも開講されたか？）

葉山というのは八幡が所属する二年F組で最も人気のあるイケメン男子学生であり、サッカー部のエースであり、学校一のモテ男である。——つまり、八幡の対極に位置する男子生徒だ。

突然の騒ぎに戸塚も気づいたのか、自分の方に飛んできたテニスボールをラケットで受け止め、コートの中央付近に顔を向けていた。

なんだなんだ？ と八幡も做ってコートの中央付近に視線を向ける。

そこには――

「おおっ！ 凄く鋭いストロークッ！ 大隣お前、テニス経験者かっ？」

「……別に。こんなのただの玉遊びですし」

――どこぞのテニス漫画みたいな試合を繰り広げる教師と生徒の姿があった。というか、まさかの問題児・大隣良夜だった。

長めの黒髪を激しく揺らしながらも涼しげな顔でラケットを操る良夜。小柄な体軀は端から端に撃ち込まれるボールには追いつけないように見えるが、持ち前の素早さを駆使して全てのボールを的確に厚木へと打ち返している。

その姿、まさにテニスの王子様。

あとは顔立ちが葉山だったら完璧なのだが、残念ながらこの王子様は眠たげな目をした中性的男子だ。

手先は器用だとは分かってたが、まさか運動神経も抜群だとはな……爆発しろ。無駄なスベックを所有している良夜に八幡は心の中で愚痴を零す。

良夜のプレーを見ていた戸塚は目をキラキラと輝かせる。

「大隣くん、テニス上手なんだ……テニス部に入ってくれないかなあ……ッ？」

やばい。俺の戸塚があの問題児に寝取られる！

「い、いや、あいつは部活なんかには興味ないと思うぜ？ ほら、いつも授業中にやってるアレあるだろ？ 大隣は自分がやりたい事だけをやる人間なんだよ。だから部活には向いてねえよ、大隣は」

「そうなのかなあ……」

不自然に必死な八幡の妙に説得力のある説得を受け、考え込んでしまう戸塚。こういう屁理屈が八幡のぼっち生活における七つ道具だったりするのだが、ぶっちゃけ彼以外には大して役に立つことはない。屁理屈なんて使わない方が良い訳だし。そんな事はさておいて。

コートを一つ占拠して教師と互角の戦いを繰り広げている良夜に注目する事にしてしよう。

「んのっ……それなら、こういうのはどうだっ!？」

「っ！」

コート後方でロブを打っていた良夜に厚木はネットギリギリのドロップショットを打つも、ロケットスタートを決めた良夜は難なくこれを打ち返す。彼が返した

ボールは厚木のコートのエンドラインに落ち、厚木が追い付く間もなくボールは真後ろの金網フェンスへと直撃した。

結果は良夜のストレート勝ち。

まさかの教師への圧勝だった。

おおーっ！ と三クラス分の男子が盛り上がる。

「こ、これは予想外だな……まさか俺が負けるとは……」

「実力ですって、実力」

「あっはっは！ 大隣は素直だな！」

凄え。アツイバトルの後だったらあんな暴言も許されるのか……今度試してみよう。

というか、やっぱり、大隣は性格悪いなあ。性格が歪んでいる事を自負している俺がドン引きしちまうぐらいに性格に欠陥があるとか、最早日常生活に支障が出るレベルだと思うんだがなあ。

教師にすらも物怖じしない良夜に八幡は引き攣った笑いを浮かべる。
と。

厚木を撃破した良夜の元に、他クラスの生徒達が近づき始め——あつ、やばいかも。

「ひ、比企谷くん……」

「ああ。これはアイツラの無知が招いた悲劇が起きる流れだな」

八幡と戸塚の心配を他所に、他クラスの生徒達は良夜に話しかける。

「なあ、お前テニス上手いのな！ ちょっと俺にも教えてくれよ！」

「つつーか一緒に試合しねー？ お前とだったら楽しいと思うんだけど」

「モチ、俺と同じチームだからな！」

「あ、お前、それ卑怯だってーの！」

わいわいがやがやと盛り上がる他クラスの生徒達。普通だったら微笑ましい青春の一ページなのだが、今回は中心にいる人物に大きな問題がある。ぶっちゃけ、悲劇が起きる未来しかない。

八幡と戸塚以外の、大隣の事を良く知るF組の面々が青褪めた顔を浮かべる中、ついにその悲劇は起こった。

「うっせえぞ」

という、短い一言。

それは良夜の口から放たれたものであり、他クラスの男子たちの盛り上がりを消し飛ばすには十分すぎるものだった。

え？　え？　と困惑する他クラス男子数名に、良夜は鋭い睨みを利かせる。

「俺ア別にアンタ等と一緒に仲良くする気なんて毛頭ねえんだけど？　こっちは厚木先生と試合をやりてえからやってただけで、別にアンタ等と試合をやる為にココにいる訳じゃねえ」

「なっ……!?!」

「コートを使ってえなら勝手に使えば？　俺ア隅の方で素振りでもやっつくからさ」

そう言って、良夜は宣告通りにテニススコートの端の方へと移動し、周囲の空気を感じることなく淡々と素振りを開始してしまった。

これを予想できていたF組の生徒達は「あーあ」と疲れたように肩を竦める。

これを予想できてなかった他クラスの生徒達は「何だアイツ……」と軽蔑の目を良夜に向ける。

これが、大隣良夜の問題性だ。

川崎沙希という一人の女子生徒以外の人間に対し、彼は徹底的なまでに拒絶的な反応を見せる。教師には一応の敬意は見せるし困っている他人がいれば助けたりもするのだが、基本的には今の様に他者を突き離すような態度をとる。

それが、大隣良夜の大きすぎる欠陥である。

「何だよアレ、性格悪っ」

「こっちが話しかけてやってんのにわっけ分かんねえ」

「ちょっと運動ができるからって調子乗ってるよなー」

(……………やっぱり始まったか)

集団を作って良夜一人への悪口を並べる他クラスの生徒達に、八幡は若干ながらに苦い表情を浮かべる。言うまでも無く、今の彼は不愉快で不機嫌な状態だ。

少数よりも多数が優先されるこの世の中では、今のような多勢に無勢な社会的暴力が蔓延っている。物理的な暴力は問題になるからと、悪口や罵倒を駆使して心にダメージを負わせ、酷い時には悪質で陰湿ないじめ行為を行ったりする始末。

個人を高めなさい、とはよく言うくせに、結果的には個人よりも大勢の方が優位

に立ってしまふ。少数派の人間は肩身の狭い思いをしなければならず、八幡や材木座のようなぼっちはもはや存在すら認められない。

キモイ、ウザい、調子に乗るな。

この三つの単語で心を抉られたのなんか、最早数えきれないぐらいに経験済みだ。無駄に群れているよりも孤高のぼっちの方が何百倍も偉大であるはずなのに、何故か八幡のような人間は差別され軽蔑され侮蔑される。

今は、そんな世の中なのだ。

だからこそ、八幡は今の世界が大っ嫌いだ。

周囲の顔色を窺わなければならぬ事に腹が立つ。

周囲の奴らに合わせなければならぬ事にイライラする。

周囲の環境に順応しなければならぬ事に辟易する。

そんな不愉快な気持ちだが、今の歪んだ八幡を生み出してしまった——その事実こそが何よりも不愉快だ。

チツ、と八幡は吐き捨てるように舌を打つ。自分と似た境遇の奴に肩入れしてしまつたせいで思い出したくない事を思い出してしまった。いかんいかん、冷静にな

るんだ比企谷八幡よ。戸塚の目の前でぐらいは大人しくしている方がベストだぞ。ふう、と数秒足らずで自分を落ち着け、八幡は戸塚の肩を優しく叩く。

「とりあえず、俺達は壁打ちを続行しよう。あっちの都合はあっちが勝手に解決するだろうからな」

「そ、そうだね……」

そう言いながらも心配そうに良夜の方を何度も見る戸塚は、やっぱり今の世の中には貴重なぐらいに優しい心の持ち主なんだろう。まさに希少種だ。是非結婚して欲しい。

(自分の事だけでも手一杯なのにあんな奴の事まで気遣ってられねっての！)
そう思いながら、比企谷八幡は壁に向かってボールを打った。

感想・批評・評価など、お待ちしております。

次回もお楽しみに！

そして川崎沙希は幼馴染みの為に動き出す

波乱のテニスコート争奪戦が終わり、ゴールデンウィークが過ぎた頃。

比企谷八幡と雪ノ下雪乃、それと由比ヶ浜結衣の三人が所属している奉仕部に、一人の相談者が来訪していた。今月に入って初めての相談者に結衣はピシッと背筋を伸ばして緊張を露わにし、雪乃はいつも通りにクールな態度を見せ、八幡は死んだ目で黙々と少女漫画（妹から借りたもの）を読んでいた。

相談者は、青っぽい黒髪が特徴の女子生徒だった。

着崩した制服の胸元には絶大な色気を醸し出す谷間が垣間見え、長めのポニーテールは彼女に活発な印象を与える。スカートは校則よりも短くなっていて、そこから伸びる長く美しい脚はまるでモデルの様。シャツの余った裾はギュッと結ばれていて、なんか全体的に改造されている感満載な服装だ。ついでの補足情報だが、目元の泣きぼくろなんかまさに色気の象徴である。

少女の名は、川崎沙希^{かわさきさき}。

八幡と結衣が在籍している二年F組の生徒であり、あの問題児・大隣良夜が唯

一心を許している希少種な少女である。

「ど、どーぞ！」

「……ん」

異常なぐらいにカチコチな結衣が用意した椅子に、沙希は大したリアクションも起こさずに腰を下ろす。

相談者が椅子に座った事で部活スイッチが入った雪乃はメモ帳を手元に拡げ、いつも通りに思いのままに質問をぶつけ始めた。

「とりあえず、名前を聞いてもいいかしら？」

「川崎沙希。二年F組に在籍してる。由比、ヶ浜……さん？ とは一応同じクラスだね」

「あたしあんまり覚えられてないんだっ!？」

「おいおいちょっと待てよなにナチュラルに俺をクラスから外しちゃってんの？俺もF組の生徒なんだけど」

「……あんだ誰？」

「クラスメイトに存在を認識されていないヒッキーってマジ凄い……」

「なに、今回は俺を虐める回なの？ それならもう俺帰るけど別にいいよね？
虐められるだけだし」

「そう言わずに最後まで部活動を全うしなさい。ハブラレくん」

「もはや名前の原型無くなっちゃったよ」

誰だよハブラレくんって。それが名字にしろ名前にしろ絶対にグレル自信があるわ。

八幡のツッコミを華麗にスルーし、雪乃は質問を続ける。

「それで？ 今回はどんな用件でここに来たのかしら？ 勘違いしている人が多いからあえて言わせてもらうのだけれど、ここは願いの手伝いをする部活であって、別にあなたの願いを叶える慈善団体ではないわ。その辺を分かった上で、相談内容を言っ頂戴」

「そんな事言われなくても分かっているよ。本当は相談なんてしなくていいんだけど、平塚先生がここに相談しに行けってうるさいから、仕方なく来ただけだし……」

やっぱりあの人の差し金かよ。っていうか、ここに来る奴らって基本的に先生の差し金だったっけ？ ここ最近の忙しさは全てあの残念系美女が元凶なのか……

本当、俺の青春ラブコメって間違ってるよな。

不服そうにそっぽを向く沙希。ただでさえ覇気のない彼女の瞳は、今ばかりは八幡に匹敵する程に元気が欠如している仕様になっていた。いや、やっぱり訂正するわ。だってそれじゃ俺が元氣のない捻くれ者って事になっちゃうじゃん。……いや、俺って異常なぐらいの捻くれ者だったわ。

心の中で一人漫才を繰り広げる八幡を他所に、雪乃と沙希のやり取りは続く。

「最近……というか、あたし達が高二になってからなんだけど。ちよつと幼馴染みの様子がおかしくてさ」

「ああ、大隣の事か」

雪乃は「????」と不思議そうな顔を浮かべる。

「比企谷くん、その幼馴染みの事を知っているの?」

「知ってるも何も、俺の隣の席に座ってるクラスメイトだよ。授業中にいつも派手で精巧で緻密な暇潰しをやってる奴で、俺以上に性格の歪んでる孤高のクリエイターってヤツだ」

「つまり、授業を真面目に受けない手先の器用な人、という事ね」

「……………まあ、あえて否定はしないよ。良夜は昔から勉強が嫌いだし、昔からあの歪んだ性格だったしね」

はああ、と溜め息交じりに沙希は居心地の悪そうな表情を浮かべる。

しかし、八幡は見逃さなかった。今までの理不尽人生の中で会得したスキル『ヒツキーアイ』を常時発動している八幡は、沙希の口元が目視不能なレベルで吊り上がっている事実を見逃さなかった。

つまり、川崎沙希は嬉しそうだった。

それは彼女が、大隣良夜という少年の事を思い出して心が晴れやかになっているという事だ。

それが何を意味するか。人の気持ちに敏感で過敏な八幡は、数秒足らずで沙希の気持ちを理解した。というか、こればかりは八幡でなくともすぐに気づけたはずだ。

その予想は間違っていないなかったらしく、八幡の隣で「う、うーん」と考えるふりをしていた結衣はばあぁと表情を明るくさせ――

「もしかして、川崎さんって大隣君の事が好きだったりする？」

「ッ!？」

——ボンッ! と沙希の顔が紅蓮に染まった。

全ての事にやる気のない、という第一印象を周囲に与えていた彼女は耳の先まで真っ赤になり、忙しなく視線を宙に彷徨わせ始めた。それはあまりにも分かり易すぎる動揺で、八幡は思わず「……リア充爆発しろ」と小さな声で呟いてしまった。いや本当、大隣爆発しろ。

ピリピリとしていたはずの空気が何故かほんわかとしてしまったが、相変わらずのユキペディアさんは相変わらずの空気ブレイクを炸裂させる。

「つまり、貴女はその大隣君という幼馴染みと恋仲になる為に奉仕部に相談に来た、という事で間違いないかしら？」

「ち、違っ、違う! まだあたしの口から何も告げてないのに勝手に結論付けるのはやめてくれない!？」

「や、その言い訳は遅すぎるって川崎さん。ねえねえ、大隣君のどこに惚れちゃったの?？」

「お前楽しそうだな。いいぞもつとやれもつとやれ」

「……貴方達、話が進まないから少し黙っててくれる？」

「元はといえばあんたのせいだろうがっ！」

沙希渾身の一喝だった。

しかし残念、顔が紅蓮に染まっているから怖さは半減している。これが俗に言うギャップ萌えというヤツなんだろうか？ いや、こんなギャップに騙される俺ではない。俺が本当にドキッとするのは戸塚が上目遣いを浮かべていた時だけだ。……想像したら本当にドキッとしちゃったよ。恐るべし戸塚。

雪乃の天然発言によって予想外の展開に巻き込まれた沙希は熱くなった顔にべっちりと右手を当てつつも、奉仕部にやってきた本当の理由を口にした。

「良夜があたしに隠れて何をやってるのかを調べて欲しいんだ」

☆☆☆

人間観察といえは俺の右に出る者はいない！

そんな意味不明な名乗りを上げた比企谷八幡は翌日、隣の席の大隣良夜を観察する事になった。一応は後方の席である結衣も情報収集をすると思気込んでいたが、あのアホの娘にはあまり期待はすまい。何故なら彼女が由比ヶ浜結衣だからである。

世界史の教師が黒板にチョークで長ったらしい文章を書いている中、八幡は横目で隣の席を確認する。

真っ白なノートが拡げられていた。

(ん？ 今日真面目に授業を受けている、のか……？)

授業を真面目に受けずに真面目に内職をするのが大隣良夜の最大の特徴なのが、今回は彼の机の上に内職用と思われる物品は確認できない。机上には世界史の教科書が載っているため、どこからどう見ても真面目な生徒にしか見えない。

もしかして改心でもしたのか？ と良い方に考えを浮かべる八幡。

しかし、歪みに歪んだ性格の良夜がそう簡単に改心している訳もなく。

「……っと」

机の中から一枚の折り紙を取り出す馬鹿が一人。

(ちよつと感極まってた俺の感動を返せ！)

やっぱり大隣は大隣だったよ！ と八幡はひくひくと頬を引き攣らせる。

そんな八幡になど気づかないしそもそも興味すらない良夜は慣れた手つきで正方形の色紙を弄び始めた。

対角線同士を繋げるように折り、更に折り、一旦広げて再び折り……それを五分ほど続けたところで――

「……………ふう」

――立体の旅客機が爆誕した。

(えい!? 今回の流れからどうやったたらそんな事になっちゃうんだよッ!?)

せめて紙飛行機で抑えとけよ。なんでリアルな旅客機が折り紙一つで完成しちゃうんだよマジ意味分かんねえ……しかもいつの間にか空気入れたし。

信じられない現実を目の当たりにした八幡の目の前で二枚目の色紙に取り掛かる

良夜。こ、今度こそ見極めてやる。お前の神業をなあ！

最早当初の目的など憶えていない八幡だったが、彼は既にそんな事にすら気づいていない。唯一のストッパーである結衣は世界史の授業のつまらなさに敗北して絶賛爆睡中で、沙希に至っては窓際の方から覇気のない目で良夜を眺めているだけだ。

腐った目に力を込める八幡。

良夜は先ほどとは違う流れで色紙を折っていき――

「……こんなもん、かな」

――立体のマ〇オが顕現した。

(ま、マンマミーア!?)

伝説の配管工の名言を思わず言ってしまう程の驚きだった。何で赤の紙一つでマリオが生まれるのかがまず理解不能だった。そして立体なのが余計に混乱を招いている。更に言うなら、手先が器用ってレベルじゃねえぞどうということだってばよ！
いろんな意味で混乱する八幡に、良夜は更なる衝撃を与える。

――クレール車 (立体)

――ブルドーザー (立体)

——タンクローリー（立体）

——マジ○ガーZ（立体）

——ガ○ダム（立体）

（折り紙の可能性って凄えええええええええええええええええッ!?!）

まさに驚きの連続だった。

まさかの働く車大集合だった。

そして更には超有名なロボット様のご登場だった。しかも、平塚先生に献上すれば飯ぐらいは奢ってくれそうな程の完成度だった。もうその道のプロになって金稼げるレベルだよ、いやもう本当その道に進むべきだよ。

観察どころか感激を越える何かを与えられた八幡は、授業の板書すらも忘れてただひたすらに良夜の作品たちをまじまじと見つめていた。芸術作品としか言いようがない立体作品に、涙すらをも流してしまっそうだ。

そんな事をやっているといつの間にか時間は経ち、授業終了のチャイムが校舎中に鳴り響いた。

「よーし。それじゃあ次までに復習しとくよーに」

世界史教師が軽い調子で教室を後にし、事実上の休み時間がスタートする。人気者の葉山隼人の元には既に大勢のクラスメイト達が集まっていて、逆に存在すら覚えられていない八幡の周りには生徒の姿すら確認できない。言うなれば、教材を机の中に押し込む作業を終えた結衣がちょうど向かっているぐらいのものだ。

そんな八幡の方に、良夜が無言で顔を向ける。

「え？」と思わず口にしてしまう八幡に笑顔すら見せることなく、良夜は机の上の作品たちを八幡の机の上に放り投げた。

「やるよ。そんなに物欲しそうな目で見てたお前に貰われんなら、そいつらも満足だろうよ」

「ひよ……おう。あ、ありがとう」

思わず囁んでしまうもなんとか礼を述べることに成功した八幡を一瞥し、良夜は教室から出て行った。大方、用を足しにでも行ったんだろう。

良夜とすれ違いで八幡の元へと近づいた結衣は彼の机の上にある芸術作品をキラキラとした瞳で見つめる。

「お、おーっ！　なにそれ凄い！　ヒツキーが作ったのっ？」

「いや、我がクラスの職人の芸術作品だ」

「ああ、大隣君のなんだ。やっぱ手先器用なんだねー」

おおっ!? ブルドーザーじゃん! と子供の様に盛り上がる結衣。

そんな彼女の傍で芸術作品たちを眺めていた八幡はぼんやりとした表情で言う。

「……平塚先生にでもあげるかね」

その呟きは結衣の耳に届くことなく、教室の喧騒に掻き消された。

感想・批評・評価など、お待ちしております。

次回もお楽しみに!

それでも比企谷八幡は苦勞する

全ての授業が終了し、全生徒が部活や帰宅などを始める放課後。

平塚先生に良夜作の作品群を献上した八幡は、下校中の良夜を尾行していた。

電柱の陰に隠れて気配を消す技——ステルスヒツキーを発動している八幡は携帯電話を耳に当て、電話の向こうにいる奉仕部部长——雪ノ下雪乃にて現在状況を報告する。

「こちら比企谷。目標は寄り道せずに下校中。オーバー？」

『こちら雪ノ下。とりあえずその気味の悪い口調を変更してくれない？ どうしようもなく寒気が走るのだけれど。オーバー』

「お前が寒気を感じてるのは俺自体についてだろうが。ああもう、なんか流れで自虐しちゃったよどうしてくれんだ！」

『知らないわよ』

相変わらずの冷徹さです。ね流石はユキペディアさん。

鼻歌交じりに歩いていく良夜の背中を数十メートル後方で眺めながら、八幡は

「はぁ」と溜め息を吐く。

「なんか怠くなってきたから帰ってもいいか？　そういえば今日はかまぐらの餌を買っていかなくちゃならないという最優先イベントがこの後に控えてたのを今思いついたわ」

『その点については心配いらないわ、比企谷君』

「は？　何でだよ」

『部活放棄で平塚先生に鉄拳制裁される恐怖を知っている貴方が、飼い猫の餌と部活を天秤に掛けられるはずがないもの。だって比企谷君、自分の身が何よりも最優先な自己中野郎だし』

「言い切っちゃったよこの人。しかも無駄に凶星だから言い訳もできねえし——
——とと、大隣が右折したぞ」

危ない危ない。無駄な毒舌会話に夢中になるあまりに大隣を見失うところだった。仕事だけは無難にこなす自分にしては珍しい失態に、八幡は僅かながらに嘆息する。

さて、ここからは尾行に集中しよう。

十字路を右折した良夜は集団で走ってきていた子供たちを軽いステップで回避し、軽い足取りで道を真っ直ぐと進んでいく。途中で大声でギャーギャー騒ぐ女子高生の集まりに追い付くも、彼は表情を変えることなく華麗にスルー。ついでに言うなら、その後には女子高生集団の横を通った八幡も華麗なスルーを見せつけた。いや、別に誰かに見られてた訳じゃねえけど。

その後も周囲の環境に全く興味を示さずに、良夜は通学路を軽い調子で歩いていくだけ。尾行している身としてはかなり面白くない状況だ。少しぐらいはトラブルに巻き込まれてくれてもいいのに……そのついでに爆発してくれれば尚良しだ。リア充は一人残らず爆発するが良い！

と、そこで、八幡はとある違和感に気づいた。

「そういえばさ、雪ノ下」

『何？』

「由比ヶ浜の奴はどうしてるんだ？ アイツにしては珍しく部活に参加してねえ気がするんだが……」

自分から率先して奉仕部に入ったぐらいだし、自分からサボる事はないと思うん

だが。

そう思いながらの疑問だったが、どうやらそれは無駄な心配だったようで――

『大丈夫。由比ヶ浜さんはちゃんと部活に参加してるわ』

「はあ？　じゃあ、由比ヶ浜はそこに居るのか？」

『いいえ、彼女はここにはいないわ。今回は別働隊としての参加になってるの』

「別働隊？」

『そろそろそっちに現れる頃だと思っただけれど……』

「は？」

こっちに現れる？　別働隊？　それってもしかして、この通学路にアイツが出現するって事か？

いやいや、それじゃあ俺の尾行が完全に水の泡になっちゃうじゃん。せっかくステルスヒツキーを作動して完璧なストーキングを見せつけてるのに、これじゃあ何の意味もねえじゃん。いや別に、有意義なストーキングがあるって言うてるわけじゃないんだけどね。でも、ちょっとやるせなくない？　なくななくなかない？

そんな事を思っていると、遂にその異変は発生した。

「あ、大隣君だ、どしたの？ 一人で下校中？」

「俺達これからマックに行くんだけど、もしよかったら大隣君も一緒に来ないか？」

「まあ？ あーしは別にどうでもいいんだけど、隼人が誘いたいって言ってるから、ここは参加する事を許可してあげてもいいよ？」

バカとイケメンと女王が現れた！

八幡は迷わず雪乃に抗議の声を上げた！

「考え得る限り最悪の作戦じゃねえか！ 何でよりもよって大隣の前にあの三人を投下するんだよ!？」

『アレは由比ヶ浜さんが考案した作戦だから、私はノータッチよ？ とうか、作戦内容なんて知らされてなかったし……』

「そりゃあお前に入ったら絶対に止められるであろう作戦だし、確認作業を省いたのは正しい判断だとは言わざるを得ないな」

俺だって確認しないとと思う。もし提示したとしても、その作戦のデメリットとメリットを一つ残らず挙げられ、その改善策について小一時間ぐらい問い詰められる

気がしてならない。というか事実、前のテニス部の時も似たような事案は発生していた。ソースは俺。

クラスメイトの三人に突然囲まれ、流石に足を止める良夜。耳に装着していたイヤホンを外し、目の前に立ちほだかる三人に彼は威嚇するように鋭い視線をぶつけ始めた。

「別に。お前らと仲良くして俺になんかメリットでもあるか？ 周囲への迷惑も考えずに自分が好きなように振舞うバカ共の仲間入りをしちまうだけだろ？ ンなの俺はごめんだね。お前らもって他の奴らを見習えよ」

「んなっ……!?!」

うっわ、女王のあんな顔久しぶりに見た気がするわ。因みに、最後にあの顔を見たのは雪ノ下と女王が言い争いをしていた時だ。

「こいつ、何様な訳!?!」「ま、まあまあ!」怒り心頭な優美子を柔らかく抑えつける隼人。あと一步で核爆発が起きてしまうぐらいに緊迫した状況か、良夜は更なる爆弾を投下する。

「そうだな、例えば比企谷とかは見習うのには最適だと思う。お前らと違って真面

目だし、お前らと違ってすべての物事を自分だけの力で解決できる強さを持つてゐるからな。……本当、お前らみたいに数揃えないと強気に出れないバカ共は俺にとっちゃ邪魔でしかねえんだよ」

だから、俺には構うな。迷惑だ。

そう最後に言い残し、良夜は結衣たちの横を通り過ぎて行った。

その後、心の底からブチ切れていた優美子を隼人が宥め、どこへともなく去って行き、八幡は結衣と合流した。

結衣は今にも泣きそうに顔を伏せる。

「……ごめんね、ヒッキー。失敗しちゃった」

「……まあ、気にすんな。アレは誰だってあんなっちゃまうよ」

川崎沙希以外には心を開かない孤高で孤独のクリエイター。

そんな彼に話しかけて無事でいられる者なんて、果たしてこの世界には存在するのか。一応は比企谷の事は快く思っている風だったが、それを態度として表に出すことはまずないだろう。

遠く小さくなっていく良夜の背中を遠目に眺め、八幡は溜め息交じりに雪ノ下へ

の報告作業を行う。

「今日はこれ以上の尾行は無理だ。結果は言うまでも無く失敗だな」

『了解。それじゃあ、比企谷君は由比ヶ浜さんを家まで送ってあげなさい。因みに拒否権はないわ』

「泣いてもいい？　ここ最近のお前の俺への態度に絶望しちゃってるんだけど」

そんなやり取りの中で、八幡はふとした違和感に気づいた。

一人歩く良夜の背中が、微妙に疲れ切っているという違和感に――。

☆☆☆

その日の夜。

比企谷八幡はぼーっとテレビを覗いていた。今日は両親が仕事で遅い為、リビングは何とも寂しい状態となっている。一応彼には妹がいるが、受験生である彼女は現

在進行形で自室でお勉強中だ。どうせそろそろ飽きが出てきてリビングへとやって来るだろうが、それについての思考はする必要がないだろう。というか、考えるだけ無駄な事だ。

しかし、考えていることほど現実になるのはこの世の性か。噂をすれば何とやら、ということわざもあるぐらいだから、あながち外れてはいないと思う。

とにかく、何が言いたいのかというところ。

妹の事を考えた矢先、その妹がリビングへとやってきたのだ。

「うう……お兄ちゃん！」

「……コーヒー入れてやるからそこに大人しく座っとけ」

「ああん！ お兄ちゃん大好き、愛してるー！ あ、今の小町的にポイント高いよ？」

「心にもねえこと言ってるじゃねえよ」

比企谷小町。

卑屈で陰険で聡明な兄とは打って変わって、快活明朗でちょっとおバカな可愛らしい妹。それ故に受験勉強に何かと手間取っているのだが、八幡という優秀な兄の

存在によってそのマイナスが微妙にカバーされているという、なんとも幸運な少女。それが比企谷家長女、比企谷小町である。

「♪」と鼻歌交じりにソファの上で足をばたつかせる小町に呆れつつも、地味な優しさでコーヒーを用意してあげるツンデレ兄。本当は妹大好き愛してるな超絶シスコンであるのだが、それを億尾にも出さないとところがなんとも彼らしい。

コトツ、とテーブルに置かれたコーヒークップを小町は両手で持ち上げる。

「うん、ありがとっ。流石はお兄ちゃんだね」

「何だよその意味不明な褒め方は。そして上目遣いやめろ。どうせそれも『小町的にポイント高い』だろ？」

「ぶー！ お兄ちゃんって本当に女心が分かってないね！ 小町は悲しいよっ。よよよ……」

「何で微妙に昭和チックなのかなんてツッコまないからな」

相変わらず冷たい八幡に小町は「チッ」と軽く舌打ちする。

熱々のコーヒーをちよつとずつ舐めるように飲む小町は、兄妹の場における話のタネを提供する事にした。

「そういえばさ。お兄ちゃんのクラスに川崎さんっているじゃん？」

「ああ、あの不良女か。ってか、何でお前が川崎のこと知ってんだよ」

「まあまあ、それについては今から話すから急かさない急かなさい」

くいつと小町はコーヒーを呷る。

「んで、その川崎さんの弟くん——あ、大志くんっていうんだけどね。なんかそのお姉さんと仲の良い知り合いが最近ちょっと様子が変、って言っててさあ」

「小町。その大志って奴とはどういう関係だ？」

「目が怖いんだけど、お兄ちゃん……」

それはきつと気のせいじゃない。何故なら俺は今こんなにも悲しいのだから！
相変わらず様子がおかしい八幡を苦笑で迎撃し、小町は話を続ける。

「様子が変って言うっても、別に挙動不審だとかそういう事じゃないらしくて。なんか、何て言うのかなー。お姉さんがバイトで忙しいのはいつも通りなんだけど、その知り合いさんがお姉さん以上に忙しそうなのが気になってー、って感じでさー」
「川崎の知り合い……？　もしかして、その知り合いの名前は隣良夜とかじゃないか？」

「あ、そうそう、そんな名前！ なに、お兄ちゃんもしかして大隣さんと知り合いなのか？ 私だけ蚊帳の外なんてちょっと寂しいかも……あ、今の小町的に高ポイントだ」

「まあ、一応クラスメイトだよ」

そしてまさかの隣の席です。

「で、大隣はその大志って奴になんか言ったりしてないのか？」

「うーん、確か何か言われてたとは言ってた気がするんだけど………あ、そうそう。大志くん、こんな事も言ってたっけ」

そう言って。

小町は人差し指を顔の前でくると振り――

『「姉ちゃんにせめて予備校でも通えよって言っとけ、って言われた」って言ったよ？』

その瞬間、八幡の頭の中で何かが弾けた。

それはここ最近の部活動に関係する事であり、自分の隣の席の人格破綻者に大きく関係する事だった。

そして翌日、比企谷八幡は動き出す。

川崎と奉仕部の面々——それと良夜を奉仕部の部室に集合させた八幡は、相変わらぬ死んだ魚のような目で彼らにこんな言葉を告げた。

「謎は、すべて解けた！」

感想・批評・評価など、お待ちしております。

次回、最終回です。

やはり俺の隣の席は色々とまちがっている

二話連続投稿です。

そして、最終回です。

「謎は、すべて解けた！」

得意気な顔でそう言い放つ八幡に良夜と沙希がまず抱いたのは、「なに言ってるだコイツ？」という憐れみと疑問の感情だった。まだここに集められた事情が分かっている沙希はまだいいが、ここに呼ばれた理由すら知らない良夜に至っては明らかにイラついた様子だ。爪先を何度も床に打ちつけている辺り、今すぐにも帰りたいたい気持ちでいっぱいなのだろう。

そんな二人の心中を察した雪ノ下は読んでいた文庫本をパタンと閉じ、

「比企谷君？ 貴方のドヤ顔で周囲の空気が腐りかけているのが理解できない？

当たるか外れるかフィフティフィフティな推理を披露したいのならさっさとやっ

て頂戴。特に、大隣君はこれからバイトも控えている事だし」

「それもそうだな。しかし雪ノ下、そこで俺が罵倒される意味が分からないんだけど？」

「気にしないで。罵倒はいつも突然なものなの。ソースは私」

「お前も突然罵倒されてきたんだな……」

「大丈夫。その罵倒してきた本人は超倍にしてやり返しを受けているわ。まったく……どうしてわざわざ昼食中に私の悪口を言ってきたのかしら、山本さんは」

「固有名詞出しちゃうのかよ」

顔も知らない山本さんにご冥福をお祈りします。

相変わらず無愛想な雪乃から意識を外し、次に八幡は沙希達二人をここまで連れてきてくれた結衣の方に顔を向ける。

「ありがとな、由比ヶ浜。その二人をここに連れてくるとか無駄にレベルが高かっただろうに……」

「い、いや、別に大丈夫だよ!? そ、そりゃまあ確かに? ちょっと怖かったっていうか、ちょー気乗りしなかったのはホントだけど……二人の間の問題を解決す

るためだったから、大丈夫！」

「二人の間の問題？ オイ沙希、どういう事だ？」

「……………それは」

「あー、いいよいいよ、川崎。無理に説明しなくて」

ここからは俺が標的になろう。

——という蛇足は心の中に仕舞い込んだまま、八幡は大隣良夜を真っ直ぐと見つめる。視線も態度も目つきも怖い、隣の席のクリエイターに、比企谷八幡は死んだ魚のような目を見せつける。

そして、彼は言う。

互いの事を大切に思うあまり、不幸な擦れ違いをしていた二人の少年少女に、孤高のぼっちは卑屈に陰険に導き出したたったひとつの真実を突きつける。

「大隣。お前、川崎の予備校代を払うためにバイトしてたんだろ？」

その日の夜。

正確に言えば、良夜のバイトが終わった深夜の事。

沙希と良夜は互いの家の近くにある公園のブランコで、たった二人で待ち合わせしていた。春の夜風が薄着の二人を襲うが、今はそんな事を気にしていられるような場合ではない。

比企谷八幡から告げられた真実。

大隣良夜が川崎沙希の予備校代を払うためにバイトをしていた、という衝撃の事実。

その真相を確かめる為、その真意を確かめる為、沙希は良夜をこの公園に呼び出したのだ。

「……最初に、聞いてもいい？」

そんな沙希の一言に、良夜は静かに頷きを返す。

「どうして、あたしが予備校に通おうとしている事を知っていたの？」

「……最初の質問だからと警戒してたが、地味に斜め上に遠ざかっちゃってるよ、その質問は」

「え？」

「俺はお前が予備校に通おうとしてるなんて知らなかった。俺は何も知らなかった。だが、俺はお前に対してずっと一つの事だけを思っていた」

——予備校に通って大学に進学して欲しい。

しかし、それには数多くの弊害があった。沙希の家が大家族で、収入に余裕があるわけではないという事も、その弊害の一つである。

だから、良夜はバイトを始めた。

自分が心を許しているたった一人の少女の為に、良夜は自分の時間を犠牲にして毎日のようにバイトに明け暮れていたのだ。

幼馴染みから告げられた衝撃の事実にも、沙希は目を潤ませる。

そんな彼女の様子には気づかない良夜は、地面を見つめたまま「ハッ」と自嘲気味に笑った。

「何様だよ、って思うだろ？ 他人の事なんだから首を突っ込むな、って思うだ

ろ？ 別に、それについては責めねえし、お前が気にする必要はねえ。だってそれは正論で、俺の行為は客観的に見ればただのお節介なんだしな」

だけど、さ。

そう、小さく付け加え、良夜は更にこう言った。

「俺は、お前には普通に幸せになって欲しいんだ。普通に予備校に通って勉強して、普通に大学に進学して楽しんで、普通に就職して結婚して、普通に幸せになって欲しい。昔から周りとは少しずれてた俺に唯一優しくしてくれたお前には、是非とも悔いの無い人生を歩んで行ってほしい。——だから、そのために俺は金を稼いだ」

笑い草だろ？ と苦笑する良夜に、何故だか沙希は苦笑いすら浮かべられなかった。

だって、自分を幸せにするためだけに、川崎沙希を予備校に通わせるためだけに、この幼馴染みは自分の限られた時間を犠牲にしていた——そんなの、笑えるわけがないじゃあないか。

自分がいなければ、この幼馴染みは普通の学生らしい生活を送っていたって事

じゃあないか。自分という存在が、彼の人生を狂わせてしまっていた——つまりはそういう事じゃあないか。

そんなの、有り得て良い訳が無い。そんなの、笑えて言い訳が無い。

——しかし。

そんな彼女に、今にも泣きそうな川崎沙希に、良夜はこんな事を言ってきた。

「でも、それももう必要ねえ。もう、お前の予備校代の為にバイトする必要もない」

「え……それは、どういう……」

さっきと、言っている事が違う。

そんな事を思った矢先に、良夜は沙希の頭を撫で始めた。

そして、彼は告げる。

自分以上にお節介で自分と同等に性格破綻者な隣の席の少年から齎された救いの道を、大隣良夜は提示する。

「なあ、沙希。スカラシップって知ってっか？」

☆☆☆

そして、次の日。

正確には、奉仕部が川崎沙希と大隣良夜の問題を解決した翌日の授業の最中。

比企谷八幡は相も変わらず溜め息を吐いていた。

その原因は言わずもがな、彼の隣の席に座っている少年にある。つい昨日、奉仕部の世話になったツンデレ系男子の授業中における内職が、今日も八幡の精神を微妙に食いつぶそうとしていた。

本日、良夜の机の上には大量の消しゴムが用意されている。

そこで、八幡は思い出した。

かつて未遂に終わった、巨大打ち上げ花火事件の事を――。

しかし、今日の八幡は比較的冷静なようで、

(……まあ、今回もどうせ未遂だろうし、気にするだけ無駄だな)

流石に授業中に花火を打ち上げはしないだろう。というか、今度こそは止めてみ

せる。そんな固い意志を持った八幡は、黒板に書かれた授業内容をノートに書き写しつつも、隣の席の作業に僅かながらに——いや、六割ぐらいの意識を向ける。

コトツ、と良夜がドミノを配置し始めた。

それはまさに一切の無駄のない無駄な動きであり、彼の完璧且つ完全な芸術作品を仕上げるためには必要不可欠な技術である。

教師が黒板にチョークを走らせるよりも速く、教師が教科書を読むよりも速く、良夜はドミノを作り上げていく。

僅か十分ほどで配置を終えた良夜は「ふう」と溜め息を吐き、最後に机の端に小さなくす玉をセットした。

(……ん？　もしかして今回は、花火は使わねえのか?)

それは思っても見ない朗報だ。花火がセットされていらない以上、無駄な心配をする必要はない。教科書で頭を隠したり平静を装いながらも小刻みに震えたりなんてことは、もうしなくて良いのだ。

机の下で小さくガッツポーズをする八幡。

そんな彼には構う事無く、良夜は静かに最初のドミノを人差し指で押し倒した。

『3』の字のような急カーブ。

階段を上って橋を通過し、再び階段を下って行く。

鉛筆を回して遠くの消しゴムを倒し、定規によって作られた坂を消しゴムが滑って行く。

滑り降りた消しゴムが次の消しゴムを倒し、ピラミッド状の消しゴムを上から順番に倒していく。

相変わらずの壮大さだが、ここで八幡はとある事実気づいた。

(あれ? この造りは、もしかしてこの間の花火と同じ……?)

そんな事などお構いなしに、ドミノは最終局面へと進んでいく。

螺旋状の階段を上って滑り台で机へと滑り降り、何の変哲もない直線やカーブが作られていく。それは机の隅々にまで達し、良夜の机上は既に消しゴムでいっぱいになっていた。

用意されていたドミノがほぼ倒れ、最後のくす玉への一直線が倒れはじめ。カカッと小さな音を奏でながら倒れていく多くの消しゴムはまさに芸術作品のようで、八幡は思わず見入ってしまった。

そして、遂にその時がやってきた。

ドミノによって紐が引つ張られてパカッとくす玉が左右に開き、紙吹雪と共に中から小さな垂れ幕が姿を現した。それには何か書かれていて、八幡は目を顰めながらもその垂れ幕に注目する。

何とかしてようやく垂れ幕の内容を確認した瞬間、八幡は茫然とした。

そこには、こう書かれていた。

《まあ、礼だけは言っとくよ》

それは、素直じゃない良夜らしい文章だった。

言葉で言うのは恥ずかしいし、手紙に書くのも照れ臭い。——だから、いつもの作品を利用して感謝の気持ちを伝えた。絶対に自分の作品を見るであろう、比企谷八幡だけに伝わる方法で。

授業終了のチャイムが鳴り響く。それは昼休みを知らせるチャイムで、生徒達がわいわいと喋りながらリラックスをする休憩の始まりだ。

相変わらず無愛想で不器用な良夜は静かに席から立ち上がり、教室の外へと歩いていく。そんな彼を窓際の席の沙希が追い、いつも通りのチョップを決める——

—そんな光景が広がっていた。

そして、これまたいつも通りに自分の席へとやってきた結衣は、座ったままの八幡に疑問をぶつける。

「ねえねえヒツキー。さっき、大隣君の方を凝視してたっぽいけど、なんかあったの？」

「いや、別に何でもねえよ。アイツと俺の間には何にもねえ」

そう、俺とアイツはただの知り合いでただのクラスメイト。それ以上の関係ではなく、下手をすればそれ以下になるぐらいの関係でしかない。

そんな、そんな他人のような関係だからこそ、八幡は思う。

授業を真面目に聞かずに毎日内職をして過ごしている、素直じゃなくせに幼馴染み想いな孤高のクリエーターに対して、八幡はこう思うのだ。

「今日も不真面目だったな、って思ったただけだ」

「ふーん？」

やはり俺の隣の席は色々とまちがっている——と。

読了感謝です。

この作品は言わずもがな、俺ガイルの世界に『隣の関くん』要素をぶっ込み、歪みに歪めた二次創作です。

もちろん、大隣は関くんとはだいぶ異なるキャラクターです。性格とか性格とか性格とか！

大隣の性格に不満を持つ人も多いでしょうが、あの世界に入れるならこれぐらい歪んでないと埋没しちゃいますからね……

時系列的に出せる俺ガイルの主要キャラクターを全部出してみたつもりではありませんが、ちゃんと揃ってるかな？ え、材木座？ なにそれ知りません知らないキャラクターです（笑）

という訳で、今作はここで筆を置かせていただくとして。

ここまで読んで下さった皆様に感謝します。

次は、他作品でお会いしましょう。

それでは、大隣と川崎さんに幸在らん事を。

やはり俺の隣の席は色々とまちがっている。【完結】

著者 秋月月日

発行日 2020年3月12日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/31444/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。